
Hell The Black

那雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H e l l T h e B l a c k

【Nコード】

N 8 6 0 7 N

【作者名】

那雲

【あらすじ】

ダークアクションファンタジー。

悲しき過去をもつ一人の暗殺者の話。

序・漆黒の闇に舞う……

リュイドラ・ルド・アーストングがまだ上流貴族だった頃、彼は先王マルストング・ルース・ロドアが体調を崩したのを聞きつけ、暗殺を企てた。

その後マルストングの暗殺は見事成功、先王の一族全てを抹殺して不穏分子を取り除き、リュイドラは王位を篡奪し玉座に就いた。

先王マルストングは各国にランドレンの賢王として、民に慕われる王として模範とされるほどの人物だった。しかし、貴族至上主義のリュイドラが玉座に就いてから、それまでは分け隔てなかったランドレンの貴族と平民の階級差は瞬く間に広がり、国は荒れた。

リュイドラが政を司るようになってから数ヶ月も経たずに、貴族ばかりが権力を握り栄え、平民と呼ばれる一般の国民たちは普通に暮らしていくのもやつとな状態にまでなってしまった。

そんな状態に一般の国民たちは黙ってはいなかった。

すぐに、王城へ抗議の国民たちは押し寄せ、王都では国民が抗議活動を行った。

しかし、国王であるリュイドラは王位を力づくで得た篡奪者。

国民たちの声など素直に聞くはずもなかった。

そればかりか、彼は武力を行使し自国の民を大量に虐殺した。

リュイドラは国民がそういった行動に出るのを見越していたのだ。

彼は独自に戦闘員を選出し、『赤棘隊』と呼ばれる軍を構成して彼らに国民の暴動の『収拾』を命じたのだった。

虐殺された国民の数はおよそ数千。

平民が集まっていたミルマーレ通りは、殺された人々の血で数週間も赤々と染まっていたという。

後にその日は血の惨劇と呼ばれた。

この事態に恐れをなした平民たちは、これ以後ひっそりと息を潜めて暮らすようになった。彼らは王に、貴族に従い何に対しても反抗

の意思を示さず従順な存在になったのだ。

その、血の惨劇と呼ばれた日から数年。

平民に過酷な労働を強い、貴族たちが甘い汁だけを吸い赤棘隊の活躍により何事も無く過ごしていた今日。

彼らに戦慄が走った。

五大貴族のオルリエス一族の長であるフロゾフ・ノル・オルリエスの一家が何者かよって殺害されたのだ。

連絡を受けた赤棘隊がその場に到着すると、血溜まりの中に横たわるオルリエス一家の死体があったという。

調べに当たった隊員の報告によると、何者かに銃弾で頭部を貫かれ、全員即死だったということだった。

そして、もう一つ。

鮮血のような色をした赤い文字で、襲撃者によって書かれたものと見られる言葉が部屋の壁に残されていたという。

『私の名は、ヘル・ザ・ブラック
地獄からの使者だ』、
と。

序・漆黒の闇に舞う……（後書き）

更新まで短かったり、長かったりと期間が不定期になると予想されます。

そのため、そのところご理解お願いいたします

>（――）< 優しくお願いします

語らう彼らは極寒の地で……

ランドレンの最北領、イズラーテは領主ラヴカが治める地だ。

冬の時期になると、豪雪地帯となるこの地域は辺り一面が白の世界と化す。

そうなれば、並の人間のイズラーテ領への出入りは困難となる。吹雪に遭えば、そのまま凍死ということもありえるからだ。

そんな冬の激しい気候を乗り切るため、領内中央に位置する領主ラヴカの住む城、アウスターテ城は快適に過ごすためのあらゆる施しが為されていた。

そのアウスターテ城の執務室の窓辺には、もうっんざりだと言わんばかりの顔で外を見つめる壮年の男がいた。

「全くこの寒さには参るな……まあ、この城は前の城主であるヘヴランが、防寒暖房設備を整えてくれたから良いが。全くありがたいことをしてくれたものよ」

最後の言葉が皮肉気味に聞こえたのは聞き違いだろうか。

クラウディウスは、小さく笑った。

「ラヴカ殿は、この雪の寒さで民が苦しんでいるかもしれないと、彼らのことを案じていらっしやるんですね」

「馬鹿を言っな。リユイドラは、貴族にのみ温情をかけ、平民は捨て置きと言ったのだぞ。臣下としてはそれに従わん訳にはいかんだろう。だから俺はそんなことは少しも思っちゃいないさ」

クラウディウスには、彼の言葉がすぐに偽りであることが分かった。肩をすくめる彼の顔が、見るからにその言葉を裏切っているのだ。

「まあ、いつになつても冬の寒さは遠慮しておきたいものだが、この季節は平和でいいな」

「そうですね」

冬は王直属の軍、赤棘隊の査察がない。大抵の領なら季節ごとに

一度あるものなのだが、イズラ―テは冬になると閉塞的な土地になるため、この時期だけ赤棘隊の査察を免れているのだ。

「この時期だけ、私も落ち着いて暮らせますよ」

静かに笑うクラウドに、ラヴカが首を振る。

「俺も信用できる奴しか側に置いていないつもりだが、どこに誰がいるかわからんからな。用心するには越したことはないぞ」

「しかし、一年中気を張っていては疲れますから」

「それはそうだが、用心は怠るな。今は例の地獄からの使者、とやらがこの国のあちこちに出没していることだしな」

「そうですね。でもまあ、私は狙われないでしょう」

「わからんぞ。あいつは人殺し、いや暗殺者というべきか？ そいつは、もしかしたら誰かの命で動いているのかもしれないんだからな、本当に用心しろよ」

「はいはい」

頷くクラウドを胡乱げに見つめるラヴカは、自分の部屋へと真っ直ぐ向かってくる荒々しい靴音を捉えた。

時同じくしてクラウドも気付いたようで、扉の方へとずっと視線を滑らせた。

足音が部屋の前で止まり、扉を叩く音がする。

「ラヴカ様、失礼してもよろしいでしょうか」

「ナウルか？」

「はい」

「入れ」

部屋へと入ってきたのは、まだ若い赤髪の青年だった。ラヴカが信頼し、彼が側近くに置く人物の一人だ。

「どうした？」

ナウルと呼ばれた青年は、ラヴカの促しに言いにくそうに答えた。

「それが……二冠塔からの連絡が途絶えたのを不審に思い、先ほど兵をやったところ、館長であるレストファ様が……」

「……もしか……」

瞠目するラヴカの予想をナウルの沈鬱な表情が肯定する。
すぐに冷静さを取り戻したラヴカは、表情を引き締めた。

「……今は事態の把握が必要だな。行くぞ」

「気を付けてください、ラヴカ殿」

クラウディウスが神妙な面持ちで言う。

「気遣い感謝する。いくぞ。ナウル」

防寒着を羽織ったラヴカはナウルを率いて、二冠塔へと険しい表情で向かった。

赤き血の……

数時間前。

今日最も吹雪が強くなっていただろうと思われる時間帯。

二冠塔館長であるレストファは、不機嫌さを顕わにして窓の外の景色を眺めていた。

「まったく……なんというところじゃ。なぜこんな不便で寂れた領へと私が飛ばされねばならんのじゃ！！あのリュイドラという小僧、よくも私をこんなところに……」

憤激したレストファは、右手で机を叩いた。

自分は元は王宮に上がることを許された臣下の一人だった。

だが、あのリュイドラとかいう若造が玉座に就いてから、その地位を剥奪され、こんな辺境に飛ばされてしまった。

彼の貴族至上主義には賛成だった。先王はそういったことを激しく嫌悪する人物だったため、表に出さなかったただけだ。

なぜ愚かな民のために、労費を割く必要があるのか。以前から自分も常々考えていたのだ。

だから、積極的に彼を支持したというのに。

（……もしかしたら、それが奴の目的だったのか）

王宮の重鎮の多くを説得する役を買って出たのは自分だ。

その役目が済んだから、自分はもう用済みということか。

「くそっ！！」

そうであれば、最初から自分はリュイドラの掌の上で転がされていたことになる。

レストファはぐつと奥歯を噛み締めた。

（おのれ……！！いつか一泡吹かせてやるわ……）

ひとり、彼はそう心に誓った。

息を吐きだしたレストファは口渇を感じ、執務室の机の前に立った。

「……おい、誰か飲み物を部屋へ」

部屋に取り付けられた内線ボタンを押し、給仕を呼びつける。

『はい、ただいま』

少しくぐもったような声が返ってきた。吹雪のせいで機械にも影響が出ているのだろう、いつもは明瞭に聞こえる音声も、今日は音割れをしている。

執務室の椅子に座ったレストファは、部屋へやってくる給仕を待った。

しかし十数分を過ぎても給仕はやって来ない。苛立ったレストファは指で机を突きながら、もう一度内線ボタンを押した。

「おい、まだなのか?！」

『……………』

レストファの言葉に返答はない。給仕場に誰もいないということか。いや、そんなはずはない。まだ、家に帰宅する時間でもないし、常に二人は誰かがいる決まりになっているのだから。

不審に思ったレストファは、回線を切り替え二冠塔所属の兵が常駐しているはずの部屋へと繋ぐ。

「おい、誰か給仕場へ行け。呼び出しに誰も応じんのじゃ。……お

い、誰か聞いておるのか?」

『……………』

レストファの顔からざっと血の気が引いた。

なぜ、必ず警備兵がいるはずの部屋から何の応答もないのだ。

こんなことは普通なら有り得ないことだ。

この二冠塔で何かが起きている。

青ざめた顔をしたレストファは、再度回線を切り替え、外部と連絡を取ろうとした。

しかし、何度ボタンを押しても、領主のいるアウスターテ城へとは繋がらない。

未だかつてない、底知れない恐怖がレストファを襲う。

慄くレストファは、執務室を飛び出すと大声で人を呼んだ。

「誰か、誰かおらんのか!!!」

しかし、誰一人として返事をする者はいない。

恐怖が最高値にまで達したレストファは、慌てて二冠搭から出る準備をし、一階へと降りるため階段へと向かった。

階段を一段降りたその時、レストファの耳に涼やかな鈴の音が届いた。

「……？ 誰がいるのか……？」

レストファは怯えながら辺りを見回す。

そして、踊り場の上に造られた大きな窓の前に座る人物の姿を捉えた。

その人物は、全身漆黒に身を染め道化師のような仮面をしていた。

仮面の側には連なる鈴が二つ揺れていた。

「な、何者だ！」

恐怖でレストファの声が裏返る。

「知りたいか？」

「?!」

一瞬の間に、得体の知れない漆黒の人物が自分の背後に移動していたのだ。

「教えてやるよ」

驚愕の表情で背後を振り返る。

カチリと微かな音がした。

あれは何の音だったか。久しく聞いていないが、絶対にどこかで聞いたことがある音だ。

「私の名は」

「

レストファが背後を向いたのとはほぼ同時。

銃声音が辺りに響く。

鮮血が飛び散り周囲を紅く彩る。

自分が撃たれたのだとレストファが気付いた時には、彼の魂はすでにこの世に無かった。

体勢を維持する力の無くなった体は、そのまま階段を転げ落ちた。血だまりが踊り場に広がる。

「ヘル・ザ・ブラックだ」

鈍く光る黒の銃口が、名の宣言と共に下ろされた。

赤き血の……（後書き）

不定期更新なのでほんと、間が極端に短かったり、長かったりします。

すいません。

でもきちんと投稿していくつもりです。

>（――）<よろしく願います

恐怖に満ちる……

二冠塔に到着したラヴカはすぐさまナウルが派遣した兵士と合流した。

「何があつた？」

ラヴカの気迫に圧された兵士が狼狽しつつ答える。

「はい……それが……二冠塔長であるレストファ様が、例の暗殺者に殺害された模様で……」

「二冠塔にいた他の者たちは？」

「それが、……妙なのです。レストファ様を殺害した何者かは、この兵士や給仕係全員を気絶させただけで殺してはいなかったのです。これだけの腕なのですから、殺そうと思えば殺せたはずなのに……そうか。暗殺者にその部分だけは感謝しないとな。……で、レストファの遺体は？」

「こちらです」

兵士の後にラヴカとナウルが続く。

「これは……」

惨状にナウルが息を呑む。

「異変に気付いて部屋から出てやられたか……銃で頭を撃たれて即死か」

ラヴカが屈みこんでレストファの遺体を観察しながら呟く。

「ラヴカ様……あれを」

ナウルの言葉にラヴカは顔を上げ、示された方向を見る。

踊り場の壁に血文字で言葉が書かれていた。

『私の名は、ヘル・ザ・ブラック。地獄からの使者だ。血は血で贖うもの。ならば私もそうすべきなのだろう……どついう意味だ？』

「さあ……」

ナウルが首を傾げる。

「ヘル・ザ・ブラックからの何らかのメッセージでしょうか」

「さあな。取りあえず二冠塔内に奴が潜んでいないか、くまなく捜せ。あとは何か仕掛けられていないかもな。それと住民にも非常事態が起きたことを出来る限り教えてやれ。回線が上手く繋がらない場合は人をやれ。ただし、そいつらには吹雪で死ぬなよと伝えておけ」

「わかりました」

ナウルが頷いて兵士たちに指示を出のを遠くに聞きながらラヴカは思考をめぐらせる。

（奴の目的は一体何なんだ……？この間は上流貴族のトップを狙うようなことをしておきながら、今度はこんな辺境の貴族を殺して……貴族狙いの殺しか……もし、誰かに雇われているにしても意図が全くわからんな……）

ヘル・ザ・ブラックに関しての情報が少なすぎるのだ。

ここであれこれ考えてもあまり意味はないかもしれない。

それより、奴への手掛かりを見つけ捕えることが先決か。何しろこの状態では、この土地から抜け出すことは容易ではない。既に奴が領地の外へ出たということはないだろう。

まだ領内に潜んでいる可能性が高い。何としても見つけ出さなくては。奴の狙いが貴族狙いだとしても、民はこの事件を恐れ、彼を恐れるだろう。

本当は、民にもこの事実を伏せておきたかったが、無差別殺人だった場合、民にも警戒心を持ってもらわなければ大惨事を招きかねない。

（まったく、赤棘隊の査察が無いから平和に過ごせると思っていたんだが、こいつのおかげでとんでもないことになったな……）

ラヴカはため息をついた。

憂う彼にはこの事件によってもう一つ悩みの種が増えていた。

貴族殺しの事件が起きたということは、春の査察の時期普段より多くの人員が割かれ、この地へとやってくるだろう。

本心を述べるなら、この事件よりもそちらの方が問題だ。
なぜなら、この領地には、この国を揺るがし、かねない爆弾が潜んで
いるからだ。

恐怖に満ちる……（後書き）

話ことが短いですが、ちまちま不定期ですが更新していこうと思います

魔女と呼ばれし……

二日後。

吹雪は止み、外に出られるまでに天気は回復した。

街の男たちは家の周囲に降り積もった雪を取り除く作業に追われ、女たちは食べ物や仕入れに買い出しに店へと赴いていた。

吹雪の激しく吹きつける風の音から一転、温かい笑い声や人々の雑談のする、賑やかさを取り戻した街の中を、険しい顔をした兵士たちが徘徊していた。

「ちよつと、その兵士さん」

杖をついた一人の老婆が、兵士を呼びとめる。

手招いて老婆は、身を屈めるよう兵士に手で指示を出した。

「どうしたんだい？ 何かあったのかい？ あたしや何かあった何て誰からも聞いちゃいないだけだねえ」

「ヘル・ザ・ブラックという殺人者がこの街にも現れたんですよ。

あの王都で有名な、地獄の使者が」

「まあ」

老婆が可愛く口を覆い、目を丸くして言う。

しかし、老婆の表情をよく見ると本気で驚いているようには見えなかった。

どちらかというとこの事件をどこかおもしろがっているようにも見える。

「おばあさん、人が一人死んでいるんですから、おもしろがっている場合じゃありませんからね。おばあさんも気を付けるんですよ。

ヘル・ザ・ブラックに出会ってしまったって殺されないように」

「はいはい。わかつとりますよ」

老婆は兵士の言葉に杖を振って返事をした。

やれやれとでもいうように兵士は首を振って、その場を離れ仲間のもとへと戻っていった。

老婆は兵士たちの背を見送ると軽快な足取りで、街からやや離れた自分の家へと向かった。

街を抜けてしばらく歩けば、丘の向こうに一人で住むには、大きすぎると言っている家が現れてくる。

この家には自分一人しか住んでいないが、家の周囲の雪かきは済まされていた。

街の男衆は、自分の家で手一杯のはずだから、彼らではない。

老婆は家に着くと、扉を開けて暖炉に火を点け、薪をくべた。

冷え切っていた家の中にじんわりと温かい空気が広がり始める。

「あー、寒い、寒い。あんた、暖炉に火も点けないで寒くなかったのかい？」

老婆は背後の暗闇に声を投げかけた。

「あんたが外に出ているのに、暖炉に火が点いていてはおかしいだろう」

涼やかな鈴の音と共に暗闇から、顔に面をつけた人物が進み出てくる。

「そんなこと誰も気にしやしないよ。街外れに住む頭のおかしなクレアばあさんのことなんかね」

「あんたがおかしいだって？」

面の男は短く鼻で笑った。

「あんたは魔女と呼ばれているようだが、別におかしくなんてないだろう。あんたのような人間がおかしいと言われるなら、世の中みんなおかしい人間ばかりだ。それに街の人間はそうは言ってるが、あんたのこの薬の知識にだいぶ頼っているだろう。さっきも一人女が来ていた。あんたがいらないからどうやら帰っていったようだが」面の男はぐるりと室内を見回した。壁のあちこちに吊るされた草花があり、戸棚には、煎じた薬や薬草の粉などが保存されている。

この国は、国の中心部つまり王都から離れていくほどに、王からの恩恵は薄れていく。そのため、王都には最新の様々な物品や薬、機械などがあるが、それらは地方にはほぼ存在しない。王都には貴族

たちが集中しているため、それらのほとんどが彼らのためだけに使われるのだ。だから、地方の人間たちは昔の知識に頼るしかないのだ。

「おや、今日は随分喋るねえ、あんた」

老婆は面の男の言葉に何の反応も示さずに暖炉に再び薪をくべた。沈黙が続いた。

「今日、街であんたの話を聞いたよ」

先に静寂を破ったのは老婆だった。

老婆が静かな声で言う。

「それで？」

「ヘル・ザ・ブラック、あんたはとんでもない男だよ……まったく」老婆は揺れる火を見つめながら呟くように言った。

「あんたが何をしようと私は構いはしない。城に報せるなり、街の人間に報せるなり好きなようにすればいい。私は私の思うようにするだけだ」

そうヘル・ザ・ブラックは椅子に座りこんだ老婆に言い放つ。

「あたしはもうこの国で、七十年以上生きてきたよ……あたしやねえ、ずっとこの国が嫌いだったよ……先々代の王もひどい政をしてねえ……ただね、先代の王様の時代だけはこの国にいて良かったと思える日があったんだよ……」

椅子を前後に揺らしながら、老婆は静かに語る。

「あたしが一度でもこの国が好きだと思えたのは、あの王様のおかげさ……だからこそ、あたしや今のこの国が大嫌いだよ」

老婆は目を閉じる。

「……だから、別にあんたが何者であろうと何をしていようとそれを知ったところで、あたしや何もしいないよ。あたしは今のこの国が大嫌いなんだ。だから、あんたがこの国を恐怖に陥れるような騒動を起こしているなんて、あたしにとっては嬉しいかぎりだよ」老婆が皺を深くして笑った。

「……」

短い沈黙の後、ヘル・ザ・ブラックは老婆に背を向けて小さく呟いた。

「今の国を好む人間なんて、ごく一部の人間しかないさ」
そう呟くと、彼は闇の中へと消えていった。

魔女と呼ばれし……（後書き）

今回は、地獄の使者さんが動く……？かもしれません。
あくまで予定ですけど（・・・・・）

更新不定期ですので、そのところご了承ください。
中編程度の作品予定です。

これも、あくまで予定です…

予定ばつかですね、この作者。
すいません

地獄の使者は金の獅子と出会い……

雪は降っていないものの、強風が辺りを支配していた。

強風に煽られ漆黒のマントが翻り視界の端で踊っている。

街の南に建つ時計塔の屋根上、ヘル・ザ・ブラックは広がる景色を仮面の下で見下ろしていた。

彼の視線の先には、イズラール領の象徴と言える建物があった。

ヘル・ザ・ブラックはそれを無表情で見つめながら、空中に身を投げる。

すぐに彼の姿は、冷たい闇に呑みこまれて消えた。

「ヘル・ザ・ブラックはまだ捕まらないみたいですね」

クラウディウスは向かいに座るラヴカに神妙な面持ちで語りかける。

「ああ。まったく、どこに潜んでいるんだか。あの吹雪の間に死んでいてくれれば助かるんだが、死体が見つからないところを見ると生きているんだろうな」

ラヴカが大きくため息をつく。

「次の標的さえわかっていれば、なあ……」

自分の手で必ず捉えて見せるのだが。

「それが分かっているれば苦労はしないでしょ、誰も」

「ただ、言ってみただけだ。いちいち返さなくていい」

そう、彼の言うとおりそれがわかれば苦労しないのだ。

そしてラヴカもそれを分かっている。これはただの愚痴だ。

「それより、ラヴ力殿あなたはこれから会議なのでは？ ヘル・ザ・ブラックのことで頭がいっぱいなのは分かりますけど、仕事を疎かにしてはダメですよ」

自分より年若いクラウドィウスに諭されたラヴ力は、肩をすくめて小さく笑った。

「お前に言われなくてもわかってるさ」

「でしょうね。ああ、ほら、痺れを切らしてナウルがやってきましたよ」

部屋の外で、荒々しい足音が鳴り響く。

数度のノックの後、返事もまたずにナウルが怒りの形相で部屋へと入ってきた。

「ラヴ力様、いいかげんに議会議室に来てください！ 議員のみなさんがお待ちなんですから！ 怒ってらっしゃるんですよ、みなさん。」

ラヴ力様お一人が遅れてらっしゃるので」

ラヴ力が愉快そうに笑った。

「あの貴族たちは、待たされることになれていないからな。あいつらはいつも権力を振りかざして、自分が権力を支配権を握っていると思い込んでいる。だから、自分より権力のある者に付き合わせられることが不服なんだろう」

「ほらほら、いいですから余計な事言っでないで早く足動かしてください！！」

ナウルがラヴ力の背を押し無理やり廊下に押し出し、クラウドィウスに一礼してから扉を閉めた。

クラウドィウスは彼らの声が遠のいていくのを聞きながら、くすりと笑った。

「全く、……あの二人は」

顔を軽く伏せて笑ったクラウドィウスは、小さく息を吐き出し天井を見上げる。

否、彼は天井を見つめているのではなく、ただ宙を見つめ何かを考え込んでいるようだった。

クラウディウスは、背を完全に椅子に預けると、息を細く吐きながら目を閉じた。

彼の瞼裏に幼き日の記憶が浮かんでは消える。

あの日を迎えるまでの温かな記憶がよみがえる。

家族の笑い声。兄弟、親戚と庭で駆け回り遊んだ日々

……

……

……い……ちゃ……

クラウディウスは瞼を震わせると目を開けた。

思いでに浸るあまりどうやら眠ってしまっていたようだ。

どのくらい、時間が経ったのだろう。

クラウディウスは部屋をぐるりと見回した。

彼の追想の余韻を、鋭く響いた音が打ち消す。

「……？ 何が……？」

クラウディウスは、訝しげに扉越しに音の聞こえた方向を見つめた。

議会議室では、仏頂面の貴族議員たちが勢ぞろいしていた。

顔には出さずに心の内で笑いながらラヴカは一番上かみの席に着いた。

彼が椅子に座るなり、貴族議員たちの一人が声を上げた。

「領主様お一人だけやけに遅いお出ましでしたが、よほど領主様はお忙しいのでしょうか」

「ええ、大変ですよ。ですからみなさんにも仕事を分けて差し上げたいくらいです」

ラヴカは、彼の皮肉にも嫌な顔一つ見せず、笑顔で言葉を返した。
「さて、みなさんのお時間を余計に取らせてしまったようですし、早々に議題に取りかかりましょうか」

机の肘をつき腕を組んだラヴカは、笑顔で貴族議員たちに言う。
これは彼なりの皮肉だったが、貴族議員たちのほとんどがそれに氣付いていないようだった。

「では……」

貴族議員の一人が紙に書かれた案件を述べていく。

それを聞きながらラヴカは胸の内で毒づく。

（こんなことを話し合ったところで、こいつらの思い通りにことが進むだけだ……こいつらの利益になるように）

ここはそういう国なのだ。

領主という名の地位にいても、結局どう足掻いても自分の力では、
貴族^{かれら}にかなわない。

磨かれた大理石の机を眺めながら、誰にも気づかれないように、ラヴカは嘆息した。

貴族の議題を読みあげる声を半ば音楽のように聞き流しながら、それが終わるのを待っていると鋭い音が聞こえ、空気が震えた。

「?!」

一瞬何が起こったかわからなかった。だが、磨かれた大理石に赤いものが伝うのを見た瞬間ラヴカは悟る。

突然の襲撃に、議会議室にいた貴族議員たちは悲鳴を上げ、扉へ向かって駆けだす。

「追い、待て!! 扉に向かうんじゃない!!」

ラヴカは議会議室の柱の影に素早く隠れ襲撃者から身を隠し、怒声を上げた。

扉を今目指せば格好の標的になるだけだ。

ラヴカの思っていた通り、貴族議員たちは扉の前に着く前に、悲鳴

と共に次々と床に倒れ伏していく。

「くそっ！」

ラヴカの頭上を弾丸が掠めた。頭をかがめ襲撃者の姿を捜す。

「一か八か取りあえず……」

ここを出なければ殺される。

ラヴカは剣を抜いて、扉を目指した。

弾丸が一直線に自分目がけて降ってくる。剣を盾にし弾丸を弾いてラヴカは進む。

と、突然弾丸の雨が止んだ。

「……？」

ゆっくりと剣を降ろそうとしたその瞬間に、風が吹いたのかと錯覚するほどの疾さで仮面の襲撃者に喉元に剣を突きつけられていた。ラヴカはごくりと喉を鳴らして、笑った。

「……お前、ヘル・ザ・ブラックか」

仮面の男　ヘル・ザ・ブラックは何も語らない。しかし、彼の言葉の代わりに、鈴が小さな音を立てて揺れた。

「殺せ。……希望としては、なるべく一発でやってくれとありがたい」

「何を言っているんですか！」

叫び声と共に扉が勢いよく開けられる。

二人は突然の乱入者に顔をそちらへ向けた。

「おい……！お前なんで……来るんじゃない、逃げる……」

自分の死が迫っても顔色一つ変えなかったラヴカだったが、クラウドデイクスの姿を見るなり血相を変えた。

「ラヴカ殿こそ、簡単に生きること諦めないでください。まだやることあるでしょう！」

クラウドデイクスは、ラヴカに向かって叫んだ。

「……貴様、領主のラヴカ・ステイ・ルーか」

剣先を喉元に突きつけたまま、ヘル・ザ・ブラックはラヴカに問うた。

「……そうだが？　それがどうした。殺すのを止めてくれるのか？」

「……」

「っ……！」

剣が動く。

ラヴカは死を覚悟した。

しかし。

彼の予想に反して、剣は彼から離れ鞘に収められる。

「ラヴカ殿！！」

クラウディウスがラヴカに駆け寄る

「……どうして殺さない？」

自分を殺さず距離を取ったヘル・ザ・ブラックに、訝しげにラヴカが問う。

「お前には関係ない」

ラヴカの問いは、短く切り捨てられた。ヘル・ザ・ブラックは背を向けその場を去ろうとした。

それまで口を閉じ成り行きを見守っていたクラウディウスが、ヘル・ザ・ブラックに語りかけた。

「……あなたは、なぜ貴族ばかりを手にかけているんですか？　それも悪名高い貴族ばかり。あなたが以前殺害した貴族の中には、貴族の中でも悪評が立っていた人物が多かった。それに、ここにいる彼らもそうだ。この地方では、彼ら、貴族たちは民を虐げ痛めつけてきた。それに、あなたは何故かラヴカ殿だけは殺そうとしなかった。何故です？」

彼の言葉がヘル・ザ・ブラックをその場に留まらせる。

「……」

「……ラヴカ殿は、この地方の民の信頼が厚く、民に他の貴族たち

のように残虐な行いはしない。だからでしょう?」

ヘル・ザ・ブラックは答えない。

「……もしかしたら、あなたは私たちと同じことをしようとしているかもしれない」

「クラウドイウス!」

ラヴカがそれ以上何も言うなと視線で述べてくる。

だが、クラウドイウスは金の髪を揺らし静かに首を振った。

「……どうせばれてしまうのは時間の問題です。彼がもし貴族の誰かに雇われて行っているにしても、彼がこの領内でこれだけ貴族を殺せば赤棘隊がやってくる、というよりやって来ないわけにはいかない。そうなれば、私の存在も明らかになる。その前に戦力を整えて置かなければ」

「……だが……」

「大丈夫ですよ。今ここで私は殺されるわけにはいかない。だから、彼に私の正体を明かすんです」

ヘル・ザ・ブラックが静かにクラウドイウスと向かい合う。

「私の名は、クラウドイウス・エシル・ロドア。先王マルストング・ルース・ロドアの息子」

「……!」

クラウドイウス・エシル・ロドア。

それは殺されたはずの王子の名だ。
生きていたのか。

「あなたも今のこの国を崩壊させるために動いているのでしょうか。だとすれば、私たちの目指すところにそう違いはないはず。どうでしょう、私たちと協力してみるといいのは」

クラウドイウスはそう言うとヘル・ザ・ブラックに手を差し出す。

「……」

沈黙が降りる。

二人が交渉決裂か、と思ったその時。

ヘル・ザ・ブラックのその手が動いた。

ゆっくりと彼がクラウドイウスの手を取ったのだ。

「　　よろしく願います」

クラウドイウスは今日一番という笑顔を浮かべ、ヘル・ザ・ブラッ
クの手を強く握った。

地獄の使者は金の獅子と出会い……（後書き）

クラウディウスの正体判明。

勘のいい人はもうわかってたかもしれないですが。

さて、アクションとか、その他もろもろとかこの後はいっぱい詰め込みますw

かくして地獄の使者は……（前書き）

大まかに言つと？部構成で考えてます……

かくして地獄の使者は……

厳しい冬が終わった。

雪が溶け大地に春が訪れてから、数か月が経った。

しかし、ランドレンは夏を迎えようとしながらも、未だ冬の肌を刺すような寒さを思わせる緊張感を保っていた。

ランドレン国内で反乱が起きたのである。

その内容は貴族が統率する軍と平民たちにより組織された軍の、二軍による戦いだ。

貴族軍が頭に置くのは、もちろん現国王であるリュイドラ・ルド・アイストングだ。片や平民軍を率いているのは、先王の息子だと言われるクラウディウス・エシル・ロドア。

先王の息子が生きていると人々に知れ渡った時、国は震撼した。

国民の多くはその報せに歓喜し、決起した。北部領を拠点に、彼らは、篡奪者リュイドラ・ルド・アイストングを討伐するため、王都を一直線に目指していた。

一方貴族は先王の息子が生きているという事実に驚きはしたものの、平民が貴族である自分たちに戦いを挑んできたことに激しく立腹し、平民たちを力で抑えようと貴族たちは反乱の報を受けてからすぐに彼らを討ちに向かった。

なぜなら貴族たちは、この戦いは自分たちの勝利で終わると確信していたからである。

リュイドラの指示を受け、臣下たちは技術大国のメリュイーから最新くろがねこくの機械兵器を輸入し、戦大国である鉄国からは高性能の武器を数々購入した。

平民たちは、武器に限りがある。しかし、自分たちには国という大きな窓があり、金が尽きない限りいくらでも物資を補給することができる。

そう思っていた。

しかし、彼ら貴族軍にとって思わぬ事態が起こる。
ある人物の出現によって。

北領内、月輪の街エリユーシカ。

数日前、戦線が張られてから貴族軍とクラウドゥスを頭に置く平民軍の睨み合いが続いていた。

数は街に立て込む平民軍の方が有利であったが、貴族軍にはメリユーイから輸入された、機械人形が配備されていた。出れば、機械人形や戦車の一斉攻撃を受ける可能性がある。

そのため平民軍は、なかなか街内から出ることがかなわなかったのだ。

一方で貴族軍は人数的には平民軍にかなり劣るものの、機械兵器や戦車を戦闘に出すことによって戦闘力の均衡をとっていた。しかし、別の場所で起きた戦いによってこの地に運ばれてくるはずだった物資が奪われたため、物資の到着を待つこととなった。

故に両者睨み合いのまま、数日が過ぎたのだった。

そしてさらにその二日後。ついに貴族軍が動きを見せた。

物資が到着し、戦闘の準備が整ったのだ。

「貴族軍が進軍し始めたぞ――！」

見張りの男が叫ぶ。

「全員持ち場につけ！ 奴らを街に入れるな――！」

リーダー格と思しき男が大声を張り上げ指示を出した。

「ローウェン、全員にジェイドたちが機械兵器を何とかするまで持

ちこたえてくれと伝えてくれ」

「はい、アルドさん」

まだ歳の若い金髪の青年が銃を抱えたまま頷き、戦場へと走って行った。

「さて、俺たちは何としてもここを死守するぞ。そのために、戦闘を長引かせて貴族軍をなるべくこちらに引きつけておく。行くぞ」アルドの言葉に頷いた男たちは、彼と共にローウェンたちがいる戦場へと向かった。

「……戦闘で人数が減っていると思ってるじゃあ、機械兵器と貴族士官や兵士の連中がまだだいぶ残ってるじゃねえか……」
ヴァンは森の茂みに身を隠しながら呟いた。

「だが、目的はあの戦艦にあるはずの機械兵器や人型機械のコントロールパネルだ。ここにいる全員と戦うわけではない」

ジェイドが声を潜めて呟く。

「だけど、あれだけ人数いて俺たちだけで任務を完了することなんてできるのか？」

「……できる、できないでは無くてやるしかない。それに、俺たち四人だけじゃない」

「……まあ、そうだけど」

「彼も力を貸してくれるさ」

三人は背後を振り返る。

しかし、そこにいるはずの彼の姿は無い。

「……て、奴はどこいった、ふごお」

思わず大声を上げそうになったヴァンの口をジェイドが押さえる。

「ヴァン、声大きい」

「ジェイド、もしかして……」

アレイドの言葉に、ジェイドは先に見える戦艦を見つめた。

「まさか……」

驚愕に息を呑むジェイドの予想は、完全に当たっていた。

見張りの兵士たちに見つかからないように貴族軍本陣の中央に位置する戦艦へと、単独で近づいたヘル・ザ・ブラックは、戦艦内部へ侵入すべく、入り口を探していた。

（見張りの兵士が二人に、人型機械人形が一体か……）

ヘル・ザ・ブラックは懷から小さな銀の短剣^{ダガー}を二本取りだした。

そして、背後から心臓のあたりを狙いを定め短剣を二人の兵士目がけて投擲した。

兵士二人が小さなうめき声を上げ倒れる。

『侵入者……侵入』

短剣を投げてすぐ、ヘル・ザ・ブラックは人型機械目がけて駆ける。双剣が唸り、人型機械の頭が飛び、胴を切り裂く。

回路が切断された人型機械は、機械屑となり果てその場に倒れる。

（入口は、どこだ……？）

正面上方に、扉が見えた。おそらくあそこが入口だろうと見当をつけたヘル・ザ・ブラックは、兵士たちに見つかからないよう、その場へ行き慎重に扉を開けた。

（まずは、戦艦内部の構造を知るのが先決か……）

戦艦内に侵入したヘル・ザ・ブラックは、すぐさま次の行動に移った。

（どこかに制御室があるはずだが……）

戦艦内を詮索していたヘル・ザ・ブラックは、人の話し声に動きを止め身を潜める。

近くの扉から二人の兵士が出てきた。

戦闘中であるというのに、その二人の兵士は笑顔で雑談に花を咲かせていた。

（……大方、大貴族の息子というところか……）

ヘル・ザ・ブラックは兵士たちが離れて行ったのを確認すると、通路に誰もいないのを確認し、戦艦内部の情報を得るため彼らがたつた今出て行ったばかりの部屋へと静かに潜入した。

「……！」

ヘル・ザ・ブラックは室内を見回し、視界の端で何かが動いたのに気付き、銃口を向けた。

「何だ？ 出て行った直後に戻ってきて。忘れ物か？ ……っと」

ベッドから起きあがった男が、銃口を向けられていたのに気付き、両手を上げる。

「……」

無言でトリガーを引こうとしたヘル・ザ・ブラックを、男が慌てて止める。

「わわわわ、ちょっと待て、落ちつけ、落ちつけよ」

「動くな」

銃口を近づけられた金茶の髪をした男は元の体勢に戻った。

「わかったよ。このままにいるから話を聞いてくれ」

「……」

無言を了承と判断して、男は勝手に話を進め始めた。

「俺の名前は、レイノル・ルタ・エリオード。あんたは？ もしかなくても、平民軍の人間だろ？ 頼むからさ、誰に殺されたかも分からずに死にたくないから、名前教えてくれないか」

「……ヘル・ザ・ブラック」

答える必要はなかったが、殺すにしろしないにしろ、すでに誰もが知っている名前であるので、隠す必要はない。

レイノルは、その名にやや目を開き口笛を吹いた。

「へえ、あんたがヘル・ザ・ブラックか。面を取って顔を見せてくれないか？ ……ってだめか。こういうのは顔見せないのが決まりだしな」

レイノルの物言いはやけに軽く、あまり貴族らしくない。

「で、あんたはこれから俺を殺すんだろ？」

レイノルの目が光る。

「あんたは、貴族をたくさん殺してるよね。まあ、仮にも俺は一応貴族なんだし？　だったら、あんたが殺す対象の一人には入ってるでしょ？　それに俺をここで逃がしたら、侵入がばれちゃうだろうしね」

両手を上げたまま、レイノルは肩をすくめた。

「本当は死にたくないんだけど、今、俺丸腰だし？　どうにもできないし。あー、なるべくなら一発でやってくれるか？　あんまり苦しみながら死にたくないんだよ、俺」

今まさに死のうとしている人間の言葉とは思えないほど、口調は明るい。

一気に毒気の抜かれたヘル・ザ・ブラックは銃口を下げた。

しかし、いつでも反応できるように、レイノルの動きには細心の注意を払って。

両手を下ろしたレイノルは、意外そうにヘル・ザ・ブラックを見た。
「あれ？　傾向からして貴族はみんな皆殺しにするのかと思ってたんだが。それとも、ただ単に気が変わって助けてくれたのか？」

「……」

「……まあ、いいや。あー、でもあんたが俺を助けてくれたのはいんだけど、このまま解放されても、俺たぶん結局処刑されるんだろうな。ヘル・ザ・ブラックと出会ったくせに殺さなかったとは、って上流貴族の連中に。あー、やだよだ」

体を半分扉の方へと向けかけていたヘル・ザ・ブラックは、顔をレイノルの方へと向けた。

「ん？　だって俺下流貴族の上に元は平民だからな。そんなにみんなから尊ばれてないわけ。だから、何か問題を起こせば一発で、こっ」

レイノルは片手で首を斬る振りをした。

「あ、そうだ」

レイノルは両手を叩き、目を輝かせた。

ヘル・ザ・ブラックは、その動作に何か嫌な予感を覚えた。

「なあ、あんた、俺を連れてってくれないか。この戦艦に潜入したってことは、何か目的があるんだろう？　俺この戦艦の乗組員だしさ、役に立つけど？」

今の自分にとってはこれとない申し出ではあるが、彼の同行を許すということは、自分を殺す機会を与え、平民軍に潜入しスパイ行為を行うかもしれないという危険性をはらんでいる。

自分は、誰にも素顔をさらしていない上、彼らが自分をヘル・ザ・ブラックと認識しているのはこの面や格好があるからだ。自分が殺害され、全てを奪われたとき、変装した貴族軍の人間が潜入しないとも限らない。

ヘル・ザ・ブラックが軽く俯いて躊躇していると、戦艦が揺れた。近くで戦車の発砲音が聞こえる。

「戦艦が動き始めたか……ここまで近づいてきたのか……あーあ、これで平民軍の連中、負けだな……」

ヘル・ザ・ブラックは顔を上げてレイノルを見る。

「あー、だってこの戦艦内の射程距離に入るからな。元々貴族軍は一気に戦いを終わらせたかったらしいし。だから、最前線にも、人型機械が多く出てるわけ。ほら、兵士そんなにいなかっただろ？」

まあ、兵士がまったくいないってのは不自然で相手に悟られる可能性があるからってことで、下級貴族出の兵士たちは戦ってるんだけどな。……要するに、捨て駒ってことだ」

「……」

「で、あんたは俺を連れて行ってくれるのか？　くれないのか？」

見上げられたヘル・ザ・ブラックは決断を迫られる。

時間がない。早く人型機械のコントロールパネルを入手し、戦艦を止めなければならぬ。こんなところで足止めをくっている場合ではない。

彼の決断は決まった。

「……いいだろう。ただし、今からお前には全てにおいて私の指示に従ってもらう。勝手な行動をした場合にはその場で殺す」

レイノルは立ちあがり、頷く。

「ああ、わかったよ」

こうして、ヘル・ザ・ブラックは敵の本拠地で、一時的な仲間を得ることとなったのだった。

かくして地獄の使者は……（後書き）

新キャラ登場。

さて、この後どうなっていくやら。

更新不定期です。そのところご理解お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8607n/>

Hell The Black

2010年10月19日15時27分発行